

森で子どもに学ぶ、子どもに伝える —小西貴士さんの自然教育—

中川僚子

「記録的な猛暑」や「集中豪雨」など、地球環境問題が身近に迫る中、未来を担う子どもたちへの環境教育が求められている。一方、持続可能な社会づくりのために、「大人が子どもから学ぶことがある」、「子どもには危機感よりも先に伝えるべきことがある」と主張する人物がいる。八ヶ岳南麓の森で自然教育活動に取り組む小西貴士さんだ。2022年12月、小西さんのフィールドを訪ね、子どもたちとの森の活動に同行し、話を聞いた。

■身体ごと森に「溶け込む」



【写真】

『子どもと森へ出かけてみれば』
小西貴士 写真／ことば
フレーベル館 2010

写真家でもある小西さんは、森で遊ぶ子どもたちをカメラに収め、ことばを添えて本にしている。訪ねた日は、4歳児8人がノネズミの冬の家を作る活動の日だった。木の根元に穴を掘り、石を組み入れてから落ち葉をかぶせ、枝を切って屋根をかけた。家づくりに熱中する子どもたちは、小西さんの写真で見た通り、森の自然に溶け込んでいるようだった。

改めて「なぜ幼児を撮るのですか？」と尋ねると、「世界に対して開かれているというか、社会化されていない彼らの身体は魅力的です」と答えが返ってきた。小西さんによれば、「身体を通して世界を理解するのは、生き物としてあたりまえ」のこと。なるほど、全身全霊で森の木々や大地に働きかける子どもたちの姿から、自分も生き物だということが伝わってきた。

では、社会化された大人はどうだろう。自然から離れて、自分がその一部であることを忘れてしまっているのでは？と問いかけたくなった。「大人が子どもから学ぶことはありますか？」と聞く

と、少し考えてから、「『地球は人の意識にのぼらないことも含めて構成されている』ということかな」と話した。確かに、自然界は多様で複雑だ。そう感じていると、小西さんが、「大人は何でも科学的に考えようとするけれど、それは人が創った世界ですから」と説明を加えた。



【写真】完成したノネズミの家

■「豊かな恵み」を伝える



【写真】子どもたちへ語りかける小西さん

就学前から必要な環境教育とよく言われるが、それでは、大人から子どもへは何を伝えればいいのか。小西さんは、持続可能な社会でも課題となっている「水」問題を例に挙げて、「大人はつい、『節水、節水』と教えてしまいがちですが、生活習慣よりも自分と水のつながりを感じられる方が大切です」と指摘した。真意を問うと、「例えば、溪谷は、飲めるような水が出しっぱなしになっているということなんです」と予想外の答えが返ってきた。

小西さんの考えは、子どもたちに将来への危機感だけでなく、「自然の豊かな恵み」を伝えることも必要だということ。そして、「人と人以外のつながりが分かるといい」と加えた。森でノネズミの暮らしを知ったり、自分にとって特別な木との出会いが思い出になるなど、子どもたちにこうしたつながりを育てることも大切だと説いた。

子どもたちを「幼い人」と呼ぶ小西さん。子どもが人として成長していくうえで大切なことはどんなことか、尋ねると、「世の中にいろいろな問題があっても、自分の存在そのものが奇跡的で素晴らしいことだと感じてもらいたいですね」と穏やかな表情で語った。

今回、八ヶ岳南麓に横浜から出かけての取材だった。別れ際に「こんな森がなければ、小西さんの描く教育は他では無理でしょうか？」と不安げに聞くと、「都会でも、生き物のつながりが多様にあることは伝えられるはずですよ」と言われ、ほっとした。



【写真】雪の森へ入って行く小西さんと子どもたち

【小西貴士さん】

山梨県北杜市高根町にある、主に保育や幼児教育、子育てに関わる人が学ぶための施設「ぐうたら村」の共同代表。森の案内や体験ワークショップ、セミナーなどを担当する。環境教育歴は20年以上。写真家でもあり、『子どもと森へ出かけてみれば』（フレーベル館 2010）、『チキュウニウマレテキタ』（風鳴舎 2020）など、著書多数。